えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第107号
平成31年
(2019)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集　「江戸の正月風景」……1～3
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会林会長代行 ……3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「荒川線に乗って飛鳥山へ！」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
『えど友』100 号記念投稿「東京風景いまむかし」
　「戦前昭和のまち並み」……6
見学会「定番・江戸城周辺探訪―その３(外濠周辺)―」‥7
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪―その 19」‥‥8
えど東京一景(14) ―南千住 素盞雄神社― ……9
江戸博クリップ「旅での想い」……9
江戸名所図会を歩く…㊶
　[高田八幡宮から高田七面堂]……10
三部会って何してるの？―総務部会の巻……11
催事案内 …… 12

新春特集

江戸の正月風景

―現在まで続いているもの　姿を消したもの―

お正月を迎えるとすがすがしい気持ちになるのは江戸の昔も今も変わりません。しかし、比べてみると変わったことも多いようです。江戸時代には現代のような曜日や休日感覚はなく、正月と盆に加え五節句や寺社の縁日を中心に、仕事を休んでいただけです。また正月２日は、新年の顔合わせ的な要素も強く、仕事は午前で終え、午後からは祝い膳を囲むことが多かったようです。改めて江戸の正月風景を見てみましょう。

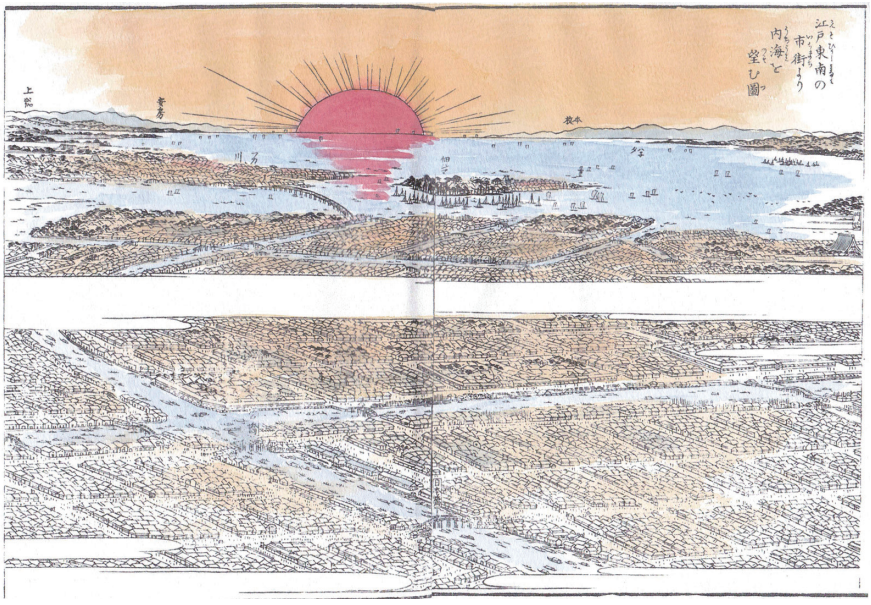
初日の出

江戸の正月は、静かだが朝は早い。中でも「初日の出」を拝む人たちは、月明かりの全くない大晦日(大月籠・新月)の夜道を、目的地まで黙々と歩きました。当時、初日の出を迎える名所は高輪、芝浦、愛宕山、神田、湯島、深川洲崎堤防などです。いずれも海に面しているか、海の見える高台にありました。

新年の祝い

一方、町中は綺麗に掃き清められ、前夜遅くまで続いた喧噪がうそのように全ての見世(店)は雨戸を閉め、物音一つしない静けさの中で新年を迎えました。それでも初日の出を拝み終えた人たちが家路につく頃には、皆起き出しました。家長を中心に若水を汲み、その水で雑煮を煮、福茶を飲んで新年を祝うためです。

若水は新年の最初に汲みあげる井戸水のことです。江戸の水道は、蛇口をひねると水が出るものではありません。文字通り水の通る道、水路のことです。四谷大木戸までは露天のまま、そこから先は地下に埋設された木樋を通って市中を巡っていました。木樋には、所々に水を溜める枡が設置され、地上と枡は井戸でつながっていました。その井戸から最初に汲みあげる水が若水です。汲みあげた水はいったん瓶に入れ、必要



▲『江戸名所図会』挿絵：長谷川雪旦　着色：広報部会・福島信一

の都度手桶で器に移して利用しました。お正月にはこの手桶も新調して輪飾りをかけ、瓶から水を汲む場合は恵方に向かって汲むのが習わしでした。

福茶とはお茶に梅干または結び昆布、あるいは両方を入れたものです。西日本各地では現在も広く行われていますが、東京では絶えた風習のようです。

恵方参りと年籠・初縁日詣

新年の祝いが終わると、再び静けさが戻ります。その後は恵方参りや氏神への初詣に出かける者もありましたが、多くは終日のんびり過ごしました。当時は現在のような初詣習慣はなく、初子(大黒天)や初不動(不動明王)などへの初縁日詣がいわば初詣のようなものでした。

恵方参りは、歳徳神(その歳の福徳を司る神で、干支によって毎歳変わる)のいる寺社へ参詣することです。氏神への初詣は、元来「年籠」でした。家長が大晦日の夜から元日の朝にかけて氏神のところへ籠る(年を越えて籠る)ことです。今年一年無事に過ごせたことへの感謝と、新年の無事と平安をお願いするためでした。これが、大晦日の「除夜詣」と元日の朝の「元日詣」の二つに分かれたのです。除夜詣は除夜の鐘突きに残り、元日詣は初詣に変化したとされています。なお、今のような氏神と全く切り離された初詣をするようになったのは、明治も半ば以降のことです。その頃発達した鉄道各社が、自社の経営する鉄道沿線にある寺社への誘客運動の一環として行ったのが最初とされます。

鳥追と小鰭の鮨売り

元日をゆっくり過ごしたからでもないでしょうが、２日になると早朝より全てのものが動きだしました。初荷、町火消しの出初、太神楽、鳥追、万歳、小鰭の鮨売り、宝船売りや暦売り、文武の稽古始めなども一斉に始まります。中でも江戸に独特なのが「鳥追」と「小鰭の鮨売り」

▲鳥追『風俗画報』

でした。

鳥追は元来、農村での害鳥駆除と豊作を願う小正月行事です。拍子木や太鼓などを賑々しく敲きながら大声をあげて歌い歩くのは、害鳥を追い払うための有効手段だからです。これを真似たのが年末に現れる「節季候」であり、年始の「鳥追」です。『嬉遊笑覧』が「毎年臘月(12月)より節季候となり、元日より15日まで鳥追となる」と書いているように、現れる時期が違うだけで、元は同じものでした。

▲節季候『人倫訓蒙図彙』

鳥追については『守貞謾稿』が、「今は京坂にはいないが、江戸には沢山いる。しかも男ではなく、女太夫がしている」と書いています。女太夫は普段から２、３人連れで三味線や胡弓を弾き語り歌う、いわばストリートミュージシャンのことです。これを元日(実際には２日)から15日までの間に限り「鳥追」と呼びました。普段の菅笠を編笠に換え、一

▲女太夫『守貞謾稿』

段とおめかしして着飾り、目出度い歌を歌い、金銭を受けていました。

江戸の鳥追が女太夫であったのは、江戸が極端な男社会だったからです。単身赴任の武士が人口の半分、残りの半分も農家の次男、三男などの出稼ぎ者が多かったからです。そんな男社会だから、女太夫にとっては普段でも武家屋敷長屋は最も稼げる場所でした。一度に市中の10倍、20倍ともらえたからです。逆に言えば、武家長屋住まいはそれほどの侘び住まいでした。まして人恋しくなる正月は、普段にも増して心寂しく気は立っていました。そんな処へボロをまとって割竹を激しく叩きながら大騒ぎする節季候姿で現れたら、騒動のタネを持ち込むようなものです。ここは一つ、割竹を三味線に持ち換えた女太夫の方が相応しい。「鳥追」に変じた女太夫が、市中へ繰り出していきました。

同じ頃、渋いながらもよく通る声で売り歩いたのが「小鰭の鮨売り」です。「坊主騙して還俗させて小鰭の鮨でも売らせたい」という都々逸が流行ったほど、声の魅力で売っていました。蓋の上に紅木綿をかけた鮨箱を重ねて肩へ担い、水浅葱の染手拭はもちろん、衣類股引腹掛から足袋草履にいたるまで新調し、正月２日の朝から「こはだのすしイ」と呼び歩いていました。『守貞謾稿』も、「重ね筥に納めて之を肩にす。(中略)初

▲小鰭の鮨売『狂歌四季人物』（部分）
国立国会図書館蔵

春には専ら小はだの鮨を呼び売る」とあります。これも江戸の正月には欠かせない光景でした。

扇箱買と餅網売り

当時年始の挨拶廻りにつきものだったのが、扇を入れた「扇箱（おうぎばこ）」でした。扇といっても立派なものより、「ばらばら扇」などと陰口をたたかれた粗悪品が多かったようです。それでも売れたのは、来客の多さを誇る見得のため、箱のまま井桁に組んで玄関先へ積み上げておく風習があったからです。ですから貰いの少ない家では、わざわざ扇箱を買ってまで積み上げていたといわれます。

そうまでして集めた扇箱も、松の内を過ぎると不要になります。心得たもので、来年用に扇箱を買い集める人がいました。それが「扇箱買（おうぎばこかい）」です。「売る内にもう買いに来る扇箱」という川柳は、人より先に買い集めようと繰り出す扇箱買を皮肉ったものです。

小正月（1月15日）ころに「餅網（もちあみ）売り」が来ると、子供たちも正月遊びをやめさせられ、正月が終わったことを実感しました。この餅網は、餅を焼く網ではありません。氷餅（こおりもち）（かき餅）を網に入れ、富士山の氷溶（こおりと）かし（6月1日の山開き、現在は7月1日）まで保存しておくための網です。

こうして正月が終わり、大人も子供も楽しみにしていた2月の初午（はつうま）・稲荷まつりの準備が始まるのでした。

▲払扇箱買『狂歌四季人物』（部分）
国立国会図書館蔵

【取材】　文：広報部会・光田憲雄

【参考資料】『東都歳事記』『江戸府内絵本風俗往来』『嬉遊笑覧』『守貞謾稿』他

新年祝辞

江戸東京博物館　館長　藤森照信

新年おめでとうございます。

オリンピックを来年に控え、競技場などの建設が急ピッチに進められ、遅れがちの気運もやっと盛り上がってきていますが、皆さまにおかれてはいかがでしょうか。

本館においてもオリンピック期間中を想定したさまざまな準備が始まっていますし、もちろんオリンピックをテーマにした展覧会も企画しています。

近年、京都などの観光地同様、本館でも来館する外国人は増加中ですが、さいわい外国語ボランティアや外国語表示といった用意をすでにしており、不具合は起きていません。あとは春の特別展示室とホールの改修完了を待つばかりです。

本年もよろしくお願いします。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長代行　林　正信

明けましておめでとうございます。

旧年中は大小ホールなどの博物館施設の改修中のなか、「友の会」事業にご参加・ご協力いただきまして、誠にありがとうございます。本年も、まだ改修工事は続くようですが、この夏ごろには大小ホール・会議室・学習室などの施設が、利用できる見通しです。

本年も昨年同様、主な事業である古文書講座・セミナー・見学会などの催事におきまして、三部会がより一層協力しあい、「友の会」事業を推進してまいる所存でございます。

何卒、本年も会員の皆様の更なるご支援とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

会員からの投稿

荒川線に乗って飛鳥山へ！

小出雅右（まさあき）

都電荒川線の路線案内図を見ていたら「東京さくらトラム」という愛称を知り、中学生の時安い都電を利用して飯田橋の名画座へ行っていたことを思い出しました。

昔、都内を40路線の都電が縦横無尽に走っていたことが信じられないです。自家用車の普及に伴い道路を走っていた都電は定時運行が難しくなり、利用者が減ってきたことにより、２路線を除き1967年から順次廃止され181kmの区間が消えました。残った路線は路面電車専用の区間が多く、渋滞の影響が少なく定時運行ができていた27系統(赤羽・王子・三ノ輪橋間)と32系統(早稲田・王子・荒川車庫前間)。これが一つになり現在の荒川線(早稲田・王子・三ノ輪橋間)になりました。

荒川線の路線案内図を見ていたら都電に乗ってみたくなり、都電に乗って飛鳥山へ小さな旅を決行。短い距離ですが久しぶりの乗車。廃止された1972年以来かもしれません。発車は昔と変わらず“チンチン”と鳴らして出発。

飛鳥山公園は８代将軍徳川吉宗が庶民の行楽地として整備、浮世絵の題材にもなっている桜の名所。ここに３つの博物館があり、３館共通の入場券を購入して入館。

まずは「紙の博物館」。王子に日本最初の洋紙製造会社が発足(王子製紙)したのを記念して紙の博物館が設立。紙の歴史・紙の利用など、紙に関するものを展示。歌舞伎で使われた紙の衣装、世界一の大きさを誇る木版画も展示されています。

次に「北区飛鳥山博物館」。北区の歴史・自然・文化を中心とした博物館。旧石器時代の道具が展示され、縄文時代の生活で使用した土器類も展示されています。北区の中里貝塚の巨大な剥ぎ取り標本(実物)が展示されていました。貝塚は貝類だけでなく生活用品や食べ物も一緒に廃棄された場所と思っていましたが、ここに展示されている貝塚は、土器や石器、魚骨や獣骨は含まれておらず貝ばかり。貝はカキやハマグリに限定されているのが、この貝塚の特徴とのこと。北区を中心とした博物館と知らずに入館しましたが、縄文時代の生活の一端を示す貝塚の巨大な剥ぎ取り標本の前では圧倒され感動しました。

最後に「渋沢資料館」。民間の立場から多数の株式会社や銀行を設立し、民間経済外交や社会公共事業に取り組んだ実業家渋沢栄一の活動を紹介する資料館。飛鳥山公園には渋沢栄一が建てた「青淵文庫（せいえんぶんこ）」「晩香廬（ばんこうろ）」が、空襲からの焼失を免れて園内に残っており見ることができました。

帰りは荒川線の庚申塚で降り巣鴨地蔵通り商店街を通り巣鴨へ、地下鉄三田線巣鴨駅で小さな旅は終りました。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月16日(火)月番中島達男さん。「昭和の名人達」のＤＶＤ(４席)を鑑賞。三代目古今亭志ん朝の「火炎太鼓」、五代目三遊亭圓楽の「紺屋高尾」、五代目柳家小さんの「宿屋の富」、六代目三遊亭圓生の「一人酒盛」で、名人芸を十分堪能した。参加者21人。

11月20日(火)月番高橋純夫さんでＤＶＤを鑑賞。立川志の輔50歳時(2004年)のPARCO演芸場での独演会、「こぶ取り爺さん」「歓喜の歌」「浜野矩随」である。いずれも14年前の志の輔の実力が分かる合計130分の熱演であった。参加者16人。

◆藩史研究会

10月５日(金)清水昌紘さんが小諸藩の発表をした。徳川の時代になり、仙石氏２代、徳川忠長が小諸城に入って佐久郡を領したが、その後次第に細分化され、小諸藩も一部分となり112年の間に久松松平・青山・酒井・西尾・石川と替わり、元禄15年以降、牧野家10代で約170年が続いた。だが、所領は領主替えごとに減少し当初の５万石から牧野氏の時には1.5万石の小藩になっていた。参加者11人。

11月９日(金)谷川よしひろさんが長門国毛利藩の支藩、長府藩の発表をした。初祖は毛利秀元。徳川の世、毛利氏の家臣でありながら３万６千石を分封され、長府藩を創設した。藩庁は現下関市の櫛崎城に置かれた。長府藩は14代続き、幕末は長州支藩と共に戊辰戦争で戦ったが、維新後は子爵どまりだった。参加者13人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

10月11日(木)米屋久右衛門の「日記」明治８年１月23日～３月４日。参加者８人。

10月25日(木)「日記」明治８年３月５日～３月16日。参加者９人。

11月８日(木)「日記」明治８年３月17日～５月５日。個人でなのか町内警備のためなのか分からないが、田中家に巡査が泊っているようだ。また若主人と小僧は夜番をするようになった。物騒な世情がうかがわれる。参加者９人。

11月22日(木)「日記」明治８年５月６日～６月８日。火葬は仏教によるものという主張から６年７月に火葬が禁止されたが、２年もたたない本年５月、禁止令は廃止になった。江戸や京都などでは土葬の土地が確保できなかったためらしい。庶民も戸惑ったであろう改変しきり。参加者７人。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月18日(木)佐藤美代子さんの担当。飛鳥山は、元亨年間に豊島氏が紀州新宮の飛鳥明神の分霊社を建てたのが山の名の由来。８代将軍吉宗の時、元文２年には野間氏から飛鳥山を召し上げて金輪寺に寄進、翌年には民間に水茶屋、楊弓場の営業を認めて庶民の遊楽場として大いに賑

わうようになる。王子権現は元亨２年領主豊島氏が紀州熊野三社より王子大神をお迎えし、熊野に倣って景観を整えたといわれる。田楽舞は昭和58年に復活し、同62年に北区無形文化財に指定された。参加者17人。
11月15日(木)菊池真一さんの担当。王子稲荷社は古くは岸稲荷と称され、関東における稲荷社の総司として厚く信仰され、大晦日の狐火伝承も加わって多くの人々が訪れる江戸北郊屈指の名所となった。慶長14年に王子稲荷社と王子権現の別当となった金輪寺は明治の神仏分離令により廃寺となり、現在の金輪寺は旧金輪寺十二坊の一つ、藤本坊がその名を継いだもの。参加者18人。

◆日本の大道芸伝承会

10月10日(水)発声練習として「外郎売り」と「がまの油売り」を行った。「日本大道芸・大道芸の会」との合同練習であるため、先月末に出演した深川江戸資料館のイベントに対する反省や今後の展望について活発な意見を交わした。参加者１人。
11月14日(水)発声練習を行った。次回３月16日(土)も出演予定の深川江戸資料館でのイベントに対する演目や練習方法について活発な意見を交わした。参加者１人。

◆江戸を語る会

10月27日(土)今回は江戸をテーマとする発表者がいなかったため、西忠夫さんが「後見人」という題で発表された。参加者６人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月25日(木)JR蕨駅に集合。三学院を参拝・見学後、中山道を江戸(板橋)方面へ向かって散策、蕨宿本陣跡、長泉院の「おしゃみの鐘」などを見学して蕨城址公園へ。蕨城は太田道灌の与力として活躍した渋川氏の城。蕨城跡碑などを見学後、大宮のさいたま市立博物館へ行き、特別展「さいたまの茶葉 大海を渡る」に出品されている太田道灌愛用の茶釜を見学した。参加者36人。
10月28日(日)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者22人。
11月25日(日)JR新川崎駅に集合。夢見ヶ崎公園へ向かった。同公園にある了源寺を参拝・見学。９号古墳の下に行き、太田道灌の説明板(当初道灌はここに築城を考えたが、兜を鷺にさらわれるという悪い夢を見たので断念しここは夢見ヶ崎と呼ばれるようになった)、太田道灌公碑、山頂にある道灌が建立したという小祠などを見学した。そのあと公園入口にある「太田道灌 山吹伝説」説明板を見学、夢見ヶ崎稲荷に参拝し休憩後、鶴見川を渡り太田道灌兜塚(夢の中の鷺が道灌の兜を落としたところといわれる)で解散した。参加者21人。
11月29日(木)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者32人。

◆文士散歩

10月20日(土)「武蔵野で暮らす文士達−屈折した太宰治を訪ねる」を実施。JR三鷹駅に集合し北口前の国木田独歩の代表作『武蔵野』のレリーフを見る。線路沿いに歩き、太宰が度々訪れた三鷹電車跨線橋へ。南口へ戻り最初の仕事部屋とした中鉢家跡、次の仕事部屋で『斜陽』を書き継いだ田辺酒店跡へ。続いて太宰の作家仲間・編集者との打ち合わせ場所であった小料理屋「千草」跡。そして最後の仕事部屋とした野川家跡、伊勢元酒店跡地に建つ太宰治文化サロンへ。『佳日』『斜陽』『人間失格』などの初版本も収蔵されている。太宰旧居跡などを経て禅林寺で森鴎外、太宰の墓をお参りした。参加者10人。
11月17日(土)「馬込大森文士村を歩く(1)」を実施した。JR大森駅に集合、天祖神社に向かう。その階段の脇に文士達のレリーフ６枚がある。ジャーマン通りに出て、徳富蘇峰の旧居跡山王草堂記念館と蘇峰公園に行く。小径を通り尾崎士郎記念館へ。北原白秋が一時住んでいたと思われる辺りを眺めつつ、山本周五郎旧居跡に。室生犀星の居宅跡を過ぎ郷土博物館へ。ここは文士の著書や原稿も多く展示されており興味深かった。参加者８人。

＊　　＊　　＊　　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ａ班『新古改撰誌記』

文化10酉年(1813)、切支丹宗門改めが行われた。中間頭が部下を調査しその際に徹底した事項を目付へ報告していた。次のような内容が記載されている。「一、先に出された御法度書について調査した結果、家来末端に至るまで切支丹は見当たらなかった。但し念のためにそれぞれが檀那寺から檀家である旨の証文をもらって置くこと」「一、今後共、切支丹らしい者を見かけたら即座に上申すること」更に10月８日に全体をまとめた「宗旨御改御証文」壱通が中間頭から目付へ提出され受領された。以上のように幕末近くになっても、江戸城内でさえ宗門改めは厳しかったことが分かる。

友の会めも(開催日と人数)

平成30年10月〜11月

◆役員会10月９日(火)14人。11月13日(火)12人。◆事業部会10月２日(火)22人。11月６日(火)24人。◆広報部会10月16日(火)13人。11月20日(火)11人。◆総務部会10月23日(火)15人。11月27日(火)12人。◆古文書講座　入門編：10月３日(水)午前81人・午後81人。11月14日(水)午前75人・午後78人。初級編：10月17日(水)午前71人・午後66人。11月21日(水)午前65人・午後64人。中級編：10月20日(土)午前40人・午後36人。11月17日(土)午前39人・午後31人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト10月４日(木)Ａ班７人。Ｂ班７人。10月18日(木)Ａ班８人。Ｂ班８人。11月１日(木)Ａ班８人。Ｂ班５人。11月15日(木)Ａ班７人。Ｂ班７人。

『えど友』100 号記念投稿

「東京風景いまむかし」

戦前昭和のまち並み

大川正明

1926年に昭和が始まり、2018年現在で92年になります。東京の昭和は関東大震災の復興とともに始まり、都市計画などによりそれ以前と比べ、まち並みも大きく変わっていきました。国土地理院提供の昭和11年(1936)航空写真①で当時の台東区付近を見ると、黒い瓦屋根で埋め尽くされた市街地が見られ、国家総動員法(昭和13年)、価格等統制令(昭和14年)など建築が制限される以前には、震災焼失したまちが曲がりなりにも市街地として復興を遂げていたことが分かります。こうした市街地も東京大空襲(昭和20年)などで、多くが再度焼失することとなりましたが(写真②)、現在も台東区では空襲焼失を逃れたまちがところどころに残っており、当時の風景を垣間見ることができます(写真③④)。戦前昭和のまちなんて珍しくもないと思うのは浅はかで、まちとして戦前昭和が残っているところは東京では限られており、多くは戦後、あるいは空襲も震災にも遭わなかった地域だったりします。まち並みを形成するこれらの建物は、震災後の昭和5～10年に建てられたものが多く、数年後には築100年になるものも出てきます。築100年のまち並みが、現在も都心に残っているなんて、凄いことだと思いませんか。しかしながら、こうした凄いと思えることも、世の中に認知されていないように思えます。戦前＝戦争に向かった悪い時代という印象からでしょうか。戦前昭和の非常に短い期間で、灰燼から市街地へと見事復興していき、空襲焼失を免れ現在も残っている。そんな歴史的まち並みを、後世に引き継いでいくことはできないものでしょうか。

① 国土地理院提供、1936 年 6 月 11 日、空襲前

② 国土地理院提供、1947 年 8 月 8 日、黒い部分は主に焼失しなかった瓦屋根の建物

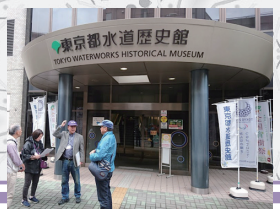
「昭和のまち並み」という言葉はよく聞きますが、その多くは戦後高度経済成長期の人口増加に伴い発展したまちを指すことが多いように思います。しかし連綿と続いてきた日本のまち並み発展の歴史を考えると、戦前昭和の建物やまち並みを知ることが非常に重要ではないかと思っております。

江戸東京博物館でも、こうした戦前昭和のまち並みや盛況ぶりに注目し、今後取り上げていただくことを期待いたします。

③ 戦前昭和の看板建築、外壁に銅板が張られている、台東区東上野 3 丁目付近、2017 年筆者撮影

④ 台東区に多く見られる戦前昭和の出し桁造り、台東区台東 3 丁目付近、2017 年筆者撮影

「東京風景いまむかし」は今回で終了となります。
たくさんのご応募ありがとうございました。



江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 30 年 10 月 14 日）

定番・江戸城周辺探訪
ーその３（外濠周辺）ー

時々晴れ間がのぞく曇り空の下、ＪＲ御茶ノ水駅聖橋口を８人ずつのグループで出発しました。外濠は「の」の字の形をしていますが、今回は「の」の頂上辺りから筆順と逆方向に歩きました。

外濠と神田川

聖橋は神田川に架かるアーチ状の美しい橋です。北側の湯島聖堂と南側のニコライ堂の二つの聖堂を結ぶという意味で名付けられたそうです。

総延長約14km の外濠は、東国大名約50家、西国大名約60家が参加した大工事で、寛永13年(1636)に完成しました。飯田橋の東で合流する江戸川を掘削し、神田山(駿河台)を切り崩して、江戸城を防備する外濠の機能を持たせました。神田山から上流は神田上水、下流が神田川となりました(今は全て神田川)。神田川は秋葉原付近までを仙台堀ともいいました。元和６年(1620)、２代将軍秀忠の命を受け仙台藩伊達政宗が開削を担当したためです。

地名が語る歴史

外堀通りから脇道に入り、東京都水道歴史館を見学して、外堀通りに戻りました。お茶の水坂を下っていくと元町公園入口に説明板があり、お茶の水の地名の由来が書かれていました。禅寺光林寺境内東の川辺にあった湧水を、秀忠に献上したところ、「お茶に用いるのに良い水である」とされ、今もお茶の水の地名として残っているのだそうです。

さらに進んで水道橋駅手前に神田上水懸樋跡の石碑があります。水源の井之頭池を発し、小石川関口で神田上水と江戸川に分かれます。神田上水は水戸徳川家上屋敷内(現小石川後楽園)を通り、懸樋を使って神田川の上を越えた後、神田・日本橋方面に給水していたのです。水道歴史館で模型を見ていたので、その様子は容易にイメージでき、水道橋の地名はこの懸樋に由来するのだと知りました。懸樋の水番はウナギ屋も営み、美味いウナギと評判だったとか。

▲神田上水懸樋跡

水戸徳川家ゆかりの小石川

ＪＲ水道橋駅東口から白山通りへ。幕府の武芸訓練機関である講武所は日大法学部のあるこの辺りに万延２年(1861)に設置されました。西側に歩くと高松藩松平讃岐守上屋敷跡です。高松藩藩祖は水戸徳川家藩祖頼房の長男です。幕末に水戸藩徳川斉昭らを中心とする軍政改革を提唱する動きがありました。講武所がこの地にあるのは、水戸徳川家上屋敷と松平讃岐守上屋敷に隣接していたことに関係があるかもしれません。痕跡は全くありませんが、近くの小石川橋南たもとに小石川見附がありました。門外に水戸徳川家上屋敷があったため通称水戸様御門とも呼ばれました。屋敷の庭園であった小石川後楽園には入園しませんでしたが、広さを感じながら脇の散策路を通り抜けました。ＪＲ飯田橋駅前に出ると、高速道路と歩道橋が折り重なるように頭上に架かっています。見学行程も中盤、ややしんどい足に気合を入れて巨大な歩道橋を上り下りしました。

神楽坂から牛込見附跡へ

飯田橋駅前に飯田濠が復元されていて清々しい雰囲気を作り出しています。飯田濠には神田川を上って荷を運んだ船の船着き場、揚場がありました。神楽坂より勾配が緩かった軽子坂で荷を運んだそうですが、上ってみると軽子坂も案外に急でした。今も料亭などが多い横丁を経て、日曜日で賑わう神楽坂通りへ。文禄４年(1595)、江戸三毘沙門天の一つ鎮護山善国寺が麹町から移転してきて賑わうようになり、幕末には花街が形成されました。

▲神楽坂毘沙門天の狛虎

急な神楽坂を下り飯田橋駅近く、江戸城外濠跡見附の中では最も当時の面影を残す牛込見附(牛込御門)跡を見学しました。

眼下にお濠を望み市ヶ谷へ

外濠公園はＪＲ飯田橋駅から四ツ谷駅までの約２km、かつての江戸城外濠に沿って続く遊歩道です。春の桜は見事ですが、今回は日が傾きかけた遊歩道をゆっくり新見附橋まで歩きました。明治中頃、住人の便宜を図るために埋め立てて架けられた橋です。新見附橋を渡って外堀通りを進み、市ヶ谷駅を濠の向こうに見て進むと、江戸八所八幡の一つ市谷亀岡八幡宮の石段があります。石段を上らず市ヶ谷駅方向へ。市ヶ谷見附・市ヶ谷御門の説明と、今も残されている石垣石についての話を聞き、ＪＲ市ヶ谷駅前で約４時間の見学を終了しました。　参加者89人。

▲外濠公園

【取材】文：広報部会・大橋弘依
写真：同・福田　徹

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 30 年 11 月 11 日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
ーその19（南千住～日暮里周辺）ー

秋晴れの青空広がる日曜午後、東京メトロ日比谷線三ノ輪駅に集合して出発です。

「蓑輪金杉三河しま」絵

駅前の日光街道から住宅街に入ります。池田家屋敷跡の案内板に面している通りは、当時音無川が流れ、周辺一帯には三河島や金杉の田圃が広がっていました。毎年10月～3月に鶴が飛来したため、年の暮れには将軍が「鶴御成り」でこの地を訪れました。

捕獲する鶴は１、２羽と決められ、京都の天皇や東照宮に献上されたそうです。絵には２羽の丹頂と、のどかな田園風景が描かれています。当時鷹場に指定された村の農民たちは、年貢の負担に加え、鳥獣を保護し鷹場を整備する義務も負っていました。この鷹場制度は、慶応２年(1866)には廃止されますが、一般に開放されたことで保護がなくなった鶴はやがて激減していきます。

円通寺から素盞雄神社へ

街道沿いに北上すると、金色の大きな観音像が印象的な円通寺があります。ここでは、多数の弾痕が残る旧上野寛永寺の黒門と彰義隊士の墓などを見学しました。街道沿いの素盞雄神社では樹齢約600年のイチョウの大木が黄色に色づき、境内は七五三のお祝いで賑わっていました。この地は松尾芭蕉の『奥の細道』の旅路への出発点といわれていますが、千住大橋北詰にある大橋公園が出発点だという説もあり、橋の北か南かの旅立ちの地を巡る論争は未だ決着がついていないそうです。

▲素盞雄神社の大イチョウ

「千住の大はし」絵

千住大橋は、文禄３年(1594)、徳川家康によって隅田川に架けられた最初の橋です。当初の橋は現在より上流200m程のところにありました。この辺りは「千住の河岸」と呼ばれる船着場であったため、材木や雑穀の問屋が軒を並べ活気づいていました。橋は江戸300年近く洪水に耐えてきた名橋とされていましたが、明治18年(1885)の大洪水により流され、さらに関東大震災で焼け落ちてから昭和２年(1927)、アーチ型の鉄橋になりました。その後、下流側に自動車用の新橋も新設され、現在、旧橋と新橋との２橋からなっています。

日暮里・谷中へ

千住大橋駅から京成線で日暮里駅に移動し、越智松平家の埋葬地である善性寺へ。門前では音無川に架けられていた将軍橋の一部が見られます。芋坂跨線橋を渡ると、谷中霊園沿いに天王寺があります。古くは感応寺といい、「江戸の三富」の一つとして人気を集めた天台宗の寺院です。紅葉坂を下り、御殿坂に向かいます。御殿坂では「月見寺」と呼ばれていた本行寺、山門の門扉に上野戦争の銃弾の痕が残る経王寺、七面明神が祀られている延命院に寄りました。

「日暮里諏訪の台」絵

御殿坂から諏訪台通りに入り閑静な住宅街を歩いていくと、諏方神社があります。この辺りの台地は「諏訪の台」といわれ、東方に広がった景色を一望できる景勝地であり、桜の名所でもありました。絵は、この神社の境内から描かれたもので、多くの人がお花見を楽しんでいます。現在ＪＲ山手線が走っている崖下には、右手前に日暮里村、遠方には見渡す限りの田圃が広がり、その向こうには筑波山や日光連山が見えます。

▲諏方神社

道潅山～「日暮里寺院の林泉」絵

道潅山は、太田道灌の出城の跡という説もありますが、今は関小次郎長耀入道道閑の館があったからという説が有力です。この地には、かつては船人が目印としていた船繋松がありました。青雲寺の境内であったこの一帯は、明治７年に旧加賀藩前田家の墓地となりますが、昭和47年には国許の金沢に改葬されたため、翌年その跡地が西日暮里公園となりました。「日暮里寺院の林泉」は、諏訪の台を下りて西側から眺める形で描かれています。この近辺の寺院では競って林泉を構えて花木を植えたため、四季折々の風景を楽しめました。青雲寺は修性院、妙隆寺とともに花見寺としても有名です。絵の遠方の左に見えるのが青雲寺で、中央に見える門をくぐると諏方神社へ行き着きます。右端には船繋松が！広重の遊び心でしょうか。青雲寺では馬琴筆塚などを見学した後、西日暮里の駅で解散となりました。

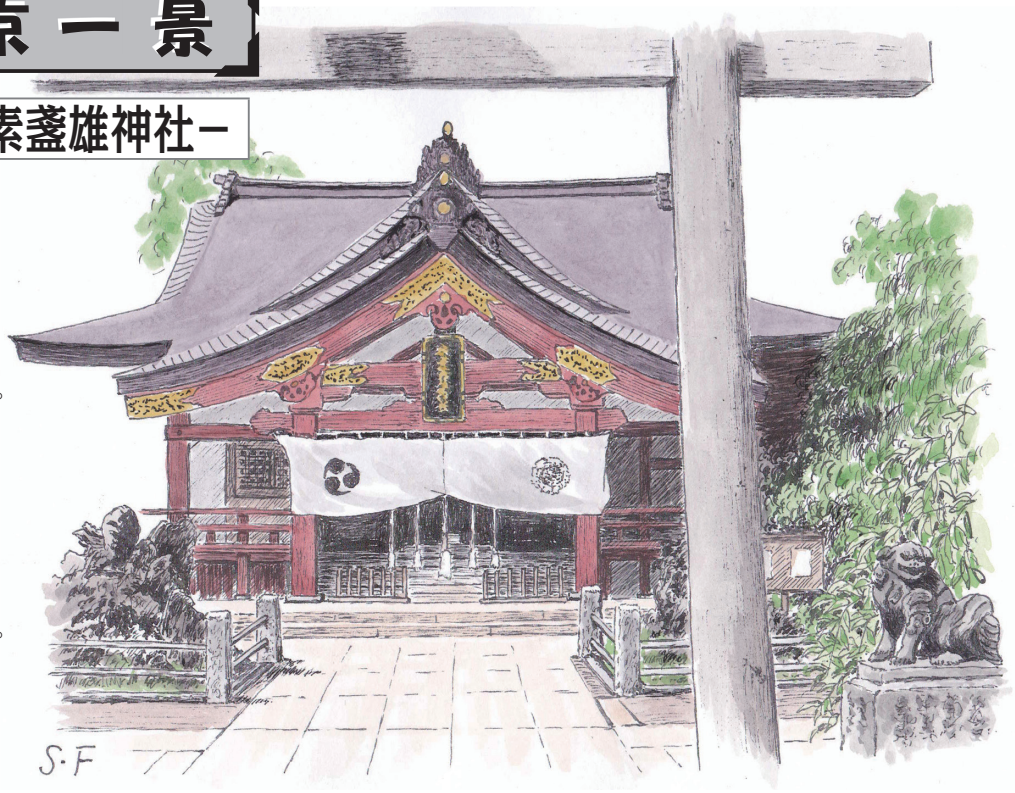
参加者117人。

【取材】文：広報部会・田辺友紀子
写真：同・菊池真一

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

えど東京一景

(14) −南千住 素盞雄神社−



数年前、南千住にある「荒川ふるさと文化館」の企画展「奥の細道・旅立ち」に行った時、隣にある素盞雄神社にお参りしました。芭蕉も旅立ちにお参りしたのでしょうか。

1200年前、修験道の行者黒珍が住んでいた近くの小高い塚の中の奇岩が突然光を放ち、二柱の神様(素盞雄大神・飛鳥大神)が現れ、黒珍は丁寧にお祀りしたとのことです。このご祭神が現れた小塚から小塚原の地名が起こり、素盞雄神社は今も荒川の鎮守として大切にされています。

享保12年(1727)二柱の神様を祀る社殿が再建され、『江戸名所図会』では「飛鳥社小塚原天王宮」と記されています。当時の名所案内にはこの境内を飛鳥の杜と紹介しています。この小塚の形が富士塚と同じものに映ったため、南千住富士とも呼ばれ、元治年間(1864〜65)には本格的に塚が築かれました。素盞雄大神は身に降りかかる罪・穢れ・災い・厄などを荒々しいほどの力で祓い清める災厄除けの神様です。別名牛頭天王、通称を「お天王さま」といわれています。

毎年6月3日の天王祭が61カ町の総代をはじめ氏子の参列のもと行われます。昔からの伝統で、初物の胡瓜を半紙に包んで奉納してから自分たちが食べるという祭事も継承されています。平成30年は本社神輿が渡御する3年に1度の本祭でした。稲田姫の山車人形も飾られ、前年に66年ぶりに取り換えられた8.1mの二天棒と呼ばれる担ぎ棒で、神輿を地面すれすれまで左右交互に倒し振り合う、神輿振りの大変荒々しい勇壮な情景も見られました。それ以外の年は陰祭といって本社神輿は出ませんが、町内神輿などの神輿振りを楽しめます。

【取材】文：広報部会・佐藤美代子／イラスト：同・福島信一

江戸博クリップ

旅での想い

管理課管理係　谷保美香（たにやす みか）

そこでしか体感できない景色、料理、風の匂い、音楽や街に溢れるノイズ、そして人々との出会い。旅はいつも私に様々なものを与えてくれます。

ミャンマー、スリランカを旅してきました。激しい戦禍の中でも美しい佇まいを残す遺跡がこんなにあるのかと驚きました。

寺院の門から先は裸足になります。ごつごつした石の感触、鳥の糞や水溜りでどろどろの足裏も途中からは気にならなくなり、感覚が研ぎ澄まされていくように感じました。沢山のフレスコ画や仏像の神々しさ。祈りを捧げる人々。また遺跡だけでなく圧倒的な自然にも魅せられました。

視界に入りきらないほどの満天の星空と流星。そこを浮遊する無数の蛍。ジャングルの中の宿は猿やオオトカゲ、見たこともない鳥たち、堀にはワニ、野生の象が歩く。大きな亀が波間を泳ぎ、インド洋の夕日は息を呑む美しさでした。

現地で知り合った人たちとお酒を夜更けまで酌み交わしました。皆満面の笑顔。でも数年前には家族を殺され、家に火を放たれ、逃げ回っていたそうです。「住める所があり、食事ができる。お酒まで飲める！なんて幸せなんだ！こんな幸せがあるか？俺たちは今生きてるんだぞ！」お腹の弾丸痕すらジョークに変えてパワフルに生きていく素敵な人たち。皆で泣き笑いしながら想いが祈りとなり、闇に溶けていったような濃密な時間でした。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊶

[高田八幡宮から高田七面堂]

穴八幡宮の布袋像水鉢

今回は早稲田大学の周辺を巡ります。江戸時代の史跡が数多く見られる地域です。歩いたのは秋も深まってきた10月下旬でした。

高田八幡宮から禅英山宝泉寺

東京メトロ東西線早稲田駅下車。２番出口から地上に出ると、左手に高田八幡宮(現穴八幡宮)の鳥居が見えます。寛永18年(1641)に境内の洞穴から阿弥陀如来像が発見されたため、穴八幡の名で呼ばれるようになりました。また、享保13年(1728)に徳川吉宗が奉納した「高田馬場の流鏑馬」は、その後も将軍家の厄除けや若君誕生祝いのために行われました。石段を上って楼門をくぐると、参道の右手には慶安２年(1649)に徳川家光が奉納した珍しい布袋像水鉢が置かれており、にこやかな表情には心引かれます。社殿は戦後再建されたものですが、荘厳な雰囲気が感じられます。

社殿脇から八幡坂(早稲田通り)に出ると、左隣が高田天満宮(現北野神社)の旧地、向かいが高田稲荷明神社(現水稲荷神社)の旧地(現早稲田大学)で、どちらも昭和38年(1963)に北西の甘泉園内へ移転しています。通りを渡って第三西門から大学構内に入ると、水稲荷の境内にあった富塚(古墳)の跡が残されています。これがこの辺りの戸塚という地名の元になったともいわれています。この先の９号館の辺りに、社殿と江戸最古の富士塚である高田富士がありました。

通りに戻って坂下を左折していくと、水稲荷の別当寺であった禅英山宝泉寺があります。本堂や鐘楼はモダンな建物になっていますが、梵鐘は正徳元年(1711)鋳造のものです。墓地には高田富士を築造した高田藤四郎(日行)の墓があります。

和田戸山から高田馬場

穴八幡宮前に戻って諏訪通りを進むと、左手に戸山公園が見えてきます。江戸時代にはこの一帯は和田戸山と呼ばれる地で、尾張藩徳川家の広大な下屋敷がありました。庭園には御殿、大泉水、小田原宿を模した町並みなど25の景勝地が造られていましたが、ほとんど跡形もありません。ただ築山の玉円峰だけが、今も箱根山として園内に残されています。標高44.6ｍで、当時は御府内最高峰、現在は山手線内最高峰です。手すり付きの階段があって気軽に山登りが楽しめます。なお、昭和45年からは体育の日に園内で流鏑馬が行われています。

▲長谷川雪旦：高田馬場

諏訪通りを渡って裏道を北へ向かいます。この辺りは荒蘭山(荒井山)と呼ばれるヒバリの名所でした。特に史跡はありませんが、途中の荒井山公園に地名の名残が見られます。

西早稲田交差点で早稲田通りを渡った先が、旗本たちの馬術練習場であった高田馬場跡です。早稲田通りに並行する茶屋町通りは馬場の北側に当たり、農民の開いた茶屋が並んでいました。図会の挿絵には松並木、茶屋、茶屋町通りを往来する人々、弓射や流鏑馬の様子などが描かれています。

高田稲荷明神社から高田七面堂

表通りをさらに進むと、左手に現在の水稲荷神社(旧高田稲荷明神社)の参道があります。入ってすぐ左側に立つ明治43年(1910)建立の「堀部武庸加功遺跡之碑」は、有名な「高田馬場の決闘」における堀部安兵衛の事績を顕彰する記念碑で、茶屋町通りから移されたものです。また右側には旧地にあった高田富士が移築されていますが、普段入れるのは登山道入り口の浅間神社までで、７月の高田富士祭りの時だけ登ることができるそうです。その隣には甘泉園公園の裏口があります。元の甘泉園のうち、水稲荷が移転された残りの場所を整備した公園です。裏口付近の高台は清水家下屋敷内にあった三島山で、三島明神(現三島神社)の祠がありました。また山の下に池の源泉(甘泉)があり、脇に「甘泉銘並序碑」が立てられていましたが、現在は社務所の前に移されています。さらに参道を進むと右手に鳥居があり、堂々とした造りの社殿が現れます。社殿の裏に並ぶ三島神社の祠、北野神社の社と石棺、富塚古墳はいずれも旧地から移されたものです。こうして見てくると、水稲荷全体がまるで名所博物館のように思えます。

裏の鳥居から石段を下って甘泉園公園の脇を通り、表通りから裏道に入ると如意山亮朝院があります。「赤門」と呼ばれた山門をくぐると、正面が七面大明神を安置する高田七面堂です。現在の建物は幕末に建てられた入母屋造り、銅板葺きで、ガラス戸越しに「木造七面大明神半迦像」が見られます。堂前に立つ宝永２年(1705)奉納の金剛力士像は珍しい石造りで、新宿区内では唯一のものです。戦災を免れたため、本堂や七面堂は江戸時代の建築が残る貴重なものとなっています。表通りに戻ると、都電荒川線面影橋駅は間近です。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

三部会って何してるの？ー総務部会の巻

はじめに

“総務”というと会社やお役所の総務部が連想され偉そうに聞こえますが、友の会ではそんなに偉いものではありません。事業部会や広報部会のように直接会員の皆さんに接する機会が少ないので、まあ「縁の下の力持ち」、いや女性が多いので「縁の下の力なし」かもしれません。

そんな総務部会の仕事は大きく分けて３つあります。①総会の準備および運営②会報、博物館情報などの発送③三部会等交流会の運営、えど友サークル活動の管理その他です。これらを担っている部会員は30人で、うち女性が19人、男性が11人です。

総会の準備と運営

まず年１回の定期総会ですが、このところ江戸博のホールが使えないので外での開催となり、準備は会場探しから始まります。アクセスのよい、なるべく安価な会場を探します。というわけで、今年の会場も昨年と同じ亀戸文化センターのカメリアホールをすでに確保してあります。早めに準備が要るのは総会終了後の交流会も同じです。価格、料理内容などを検討し、４、５カ月前には予約をします。

総会当日の運営は三部会が協力して行いますが、その中心になるのも総務部会です。そのため数カ月前から計画を立てて各部会に提示し、担当・協力をお願いします。当日の受付は総務部会が担当しますが、名札の準備・確認などは前もって部会員が集まり行っています。このように総会１日のためにいろいろな準備が要るのですが、無事に総会・交流会が終わったときは、ほっとして嬉しいものです。

会報、博物館情報などの発送

２カ月に１回の会報『えど友』に併せて、博物館からの情報を載せた資料などを発送するのも総務部会の大事な仕事です。毎回1,500～1,600部を発送しています。

会報はもちろんですが、博物館関係の情報として、『江戸東京博物館NEWS』や企画展、特別展などのチラシ、江戸東京たてもの園のチラシなども皆さんにとって貴重な情報源ではないでしょうか。

手順としては発送すべき資料、封筒、宛名ラベルなどを集めるところから始め、まず宛名ラベルを封筒に貼ります。当日参加者は３、４グループに分かれ、発送すべき資料をそろえて封筒に入れ、封をして配達用の段ボールに詰めます。この段ボールを台車に積むのですが、重くて女性には大変な仕事です。これらを配送業者が取りにくる時間までに終わらせなければならず、これも大変なことです。こうした作業を、どうか会員の皆さんに会報などが無事届きますようにと念じながら行っているのです。

ですから会報などが届いたとき、総務部会の発送作業のことを少しでも思い浮かべていただけたら幸いに思うのです。

三部会等交流会の運営など

友の会では各部会で活動されている皆さんへの慰労を兼ねて三部会等交流会を行っていますが、この準備・運営も総務部会の担当です。会場の予約から当日の企画・進行まで、これも皆さんに喜んでいただけるように努めています。

また「えど友サークル」についても全体の管理は総務部会の担当です。「えど友サークル」は原則として各サークルの自主的運営に任されているのですが、友の会として不公平のないようできる限りの支援をしていく必要があります。そのため年１回サークル世話人連絡会議を開催し、意見交換を行っています。

このほか年１回ですが、「会員動向調査」を行い、会員の年齢構成、平均年齢、男女比、会員歴構成、居住地構成などのデータを役員の皆さんに提供し、会の運営の参考にしていただいています。さらに事務用消耗品の在庫についても毎月チェックを行い、適正な在庫となるよう管理しています。そして、事業部会から要請があった場合は、催事における要員として協力することもあります。

おわりに

このように総務部会の仕事は多いのですが、皆さん気持ちよく参加していただき、和気あいあいと作業をやっていただいています。部会員は30人いますが、全員揃うことはなかなか難しいので、１人でも多くの人に参加してお手伝いしていただきたいです。こんな総務部会ですが、今後「気は優しくて力持ち」の男性の方の入会を期待しております。もちろん女性も大歓迎です。お気軽にお問合せください。

文：総務部会・松原明子
写真：同・国定美津子

催事案内

古文書講座

◆第３期の日程

１月から今年度最終の第３期が開講します。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編　講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／９(水)、２／６(水)、３／６(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／23(水)、２／20(水)、３／20(水)

◆中級編　講師：吉成香澄さん
(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：１／19(土)、２／23(土)、３／23(土)

- 時間：各講座とも、午前の講座は10時30分～12時30分
午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも、
飯田橋・新陽ビル４階「リロの会議室　会議室A」
- 参加費：各講座とも、全３回2,400円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

江戸東京博物館常設展を楽しむ

◆久しぶりに友の会の原点である常設展の見学会を企画しました。江戸東京の歴史と人々の姿を存分にお楽しみください。
- 開催日：１月30日(水)
- 受付開始：13時15分　受付終了：13時45分　時間厳守
- 見学所要時間：約１時間半～２時間
(当日の案内は、江戸博展示ボランティアガイドにお願いしています。)
- 集合場所：江戸東京博物館１階(熊手前)
- 申込締切：１月17日(木)必着
- 定員：100人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：無料(会員は会員証を忘れずに持参してください。同伴者は常設展チケットを各自購入の上お集まりください。)

【企画担当責任者】玉木達二(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第15回 地域文化探訪・学習会　(平成30年度 第２回)

「葛飾区郷土と天文の博物館」を訪ねる

◆「葛飾区郷土と天文の博物館」は平成３年に開館しました。江戸川・荒川放水路・小合溜井(こあいためい)といった大小の河川に囲まれていることから「水とかつしか」をテーマにした展示、郷土に関わる古代から近世までの歴史を紹介しています。太陽望遠鏡を備えた天文台、プラネタリウムでの解説に力を入れた活動も活発な館です。
- 開催日：２月14日(木)13時30分～14時　受付
- 開催場所：葛飾区郷土と天文の博物館
(葛飾区白鳥３－25－１)
- 学習：14時～15時30分　館の沿革・特徴などのお話を伺い、郷土展示室の「水とかつしか」「かつしかのあゆみ」「かつしかのくらし」に重点をおいてご案内いただきます。その後は自由に天文展示室なども見学、そして流れ解散です。
- 交通：京成電鉄「お花茶屋」駅下車徒歩10分
＊バスのルートもありますが、詳細は受講票でご案内します。
- 申込締切：１月31日(木)必着
- 定員：40人**(会員のみ)　定員を超えた場合は抽選**
ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

企画展のご案内

●「春を寿(ことほ)ぐ―徳川将軍家のみやび―」

会　期：１月２日(水)～３月３日(日)

会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

１月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

２月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

催事のお申込方法

◆**普通はがき(62円)**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。

◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第107号
平成31年１月１日発行(奇数月１日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信(会長代行)　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、小出雅右、横島利明、福田 徹、雨宮正彦、菊田弘和
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910